鹿沼に生きた人
生きている本

第４号

～鹿沼屈指の麻商、長谷川唯一郎と掬翠園～

長谷川唯一郎

２０２１年2月

小さな旅クラブ　鹿沼

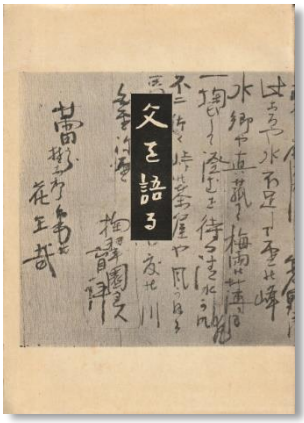
① 鹿沼の偉人の一人、長谷川唯一郎という人物を追悼文集に探る

長谷川栄一郎『父を語る』より
（昭和 34 年5月 11 日・耳澄居発行）

父 の 思 い 出

黙　念　長谷川栄一郎

一



五月晴れの朝露踏んで旅静か

昭和 32 年５月 11 日午前５時 20 分、父唯一郎は 85 才の天寿を全うして死去した。

この朝、私は何時ものように４時 50 分頃起床、５時５分からのラジオ「人生読本」を聴いていると、看護人から「様子が変です！」との大声に、父の傍に飛んで行った。啖が喉に来ているが息使いは、左程でもないようであった。眼は近頃閉じているのが常であったが、急に大きく開いて何かを探すように四方を見廻してから、うなずいて閉じようともしない。看護人をして脱脂綿に水を含ませて、口を濡らしたが受付けない。

「駄目だ！　駄目だ！」

名を呼んで見たが応答はない。これが臨終かと心に問う。「医者を呼べ」と家内に命じた。マス子は直ぐ主治医大井田病院に電話した。６－７分を経った頃に大井田先生は来たが脈は細くなるばかり、「駄目ですな！」「立派な大往生ですね！」

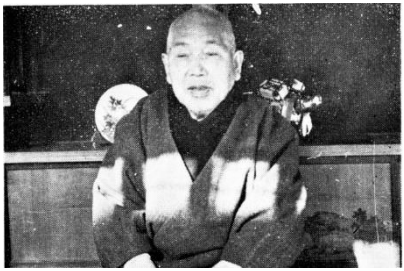
筆者、長谷川栄一郎（黙念）
写真提供：新川キミ子さん

枕頭には栄一郎、喜美子、一郎、マス子、キミ子、それに看護人と大井田先生とに見取られて静かに眠るが如く死んで行った。

老衰の故にか、実に静かな臨終であった。心に合掌して 85 年の御苦労を謝しながら、死相

に眼を開かせぬように、顎を上に押し、またロを開かぬようにと、両手で上下から顔を押えてやった。

喜寿祝賀当時(昭和25年)の長谷川唯一郎



最晩年の姿（昭和32年1月）
←↑写真は本書口絵より

昨夕東京に帰った弟勝三郎に電話で知らせ、文子、勝子に遺骸を托して、知らすべき処へ使いを走らせた。この間告別式の用意は刻々に進行して、町内組合の方々のお骨折り、親戚知人の手によって、その準備は進められた。

やがて、各方面から花輪が庭に運び込まれる。知らせで馳せつける人々、通夜も終って五月闇の迫る頃、入棺を終って遺骸はお堂に移された。

5月12日朝は雨であったが、午近い頃には雲の切れ目が見えて晴れ出した。

午後1時から雲竜寺本堂で、仏式によって葬送式が営まれた。殊に東京製綱からは三木社長を始め、役員、部長さんの多くの顔も揃って来られたし、父の旧友の方々も遠くは蒲郡から、東京から銚子から来られて、町内有志は勿論のこと、鈴木鹿沼市長さんを始め、父の生前の功績を知って頂いている方々の参集200名近くが本堂を埋めた。

霊前に捧げられた弔辞弔電も多数で、父の生前を物語るに足るものがあった。

二

父の死去当時、毎朝その写真の前に香華を手向けて、合掌念仏を捧げたが、この頃はそれも怠り勝ちに、雨降り礼拝になったことを心に感じ、亡父にも相済まぬこととは知りながらも、俗事雑事に追い廻されている現実である。

父の写真に対する時、父の手掛けた遺品の数々に接する折々に、父は私にいろいろなことを語ってくれる。そして、その多くが私の到らなさを叱る様に、亦、叱っても如何にもならぬ、致し方のない子だと諦めているか

の様に、感じられる。全く不肖の子である自分を詫びながらも、自分でも何うにもならぬ自分を、如何せんやである。

父は遺された一品一木一草に、一家の繁栄と後世までの幸福を封じ込んであるのだろうが、父との年齢の差、心境の推移、時代の変遷、認識の相違等々のためにか、父生前中は親不幸勝ちであったし、父も弱くなった頃からは、時局の圧力に対して、例えば原子力や第３次大戦の恐怖等々を、独りで考えて思い悩んでいた様子も、痛々しい程であった。

お友達のぽつりぽつりと死んで行かれる訃報には、殊に自分の死期到来を感じてか、独り涙していた様子もチラリと見たことも、思い出に湧いて来る。

父としても弟や妹や嫁や家内を先立たれて、人生の悲哀を感じてはいたのであろう。そうした様子を知って昔のように句作をして、気を晴らしては何うかといって、ノートや鉛筆を手近に置いても、それを取ろうともしないし､テレビを入れて病床の徒然を慰めようとしても､眠っているのか、聴いているのか、解し難い毎日が続いた。

月日は流るる水の如しとか、来る５月 11 日が父の三周忌、死後七七日までにはと思って、手を着けたこの冊子に集録した原稿も、他の主要な用件のために、心も手も奪われて気にかかりながらも父の仏壇の下の戸袋に置かれたまま今日となったが、三周忌を期して何んとか一冊の本に纏めて、生前御交誼を賜った方々への御恩報じに見て頂いて、せめてもの亡父への供養にさせて頂きたいと念じながら、ここに多くの人々の温い御協力と、お骨折りを集積して本書は出来上ったのである。

「父は何を語ろうとしたのか？」最後の句は先年喜寿祝いの画帖に記した一句のみであり、その画帖に収められた鈴木佐東司氏の一文も、良く父の人生を語ってあるので、その筆跡を写真にして挿入した次第である。

遺児達は各々の道を進んでいることであるが、その後、その子その子の進む人生

（欠落あり？）

今の無言の父はそれについて、何んの叱言も関渉もせずに、写真は在り

し日の俤を留めているのみである。

亡き父のセーターを着てその子われ

今、この一文を書いている自分の両手の袖には、父の着た薄茶色のセーターの袖が、一寸程温かに腕を包んでいる。

朝戸を開けて眼に入る庭の一木一草にも、身辺の家具の一つ一つにも父の手紋は残っていることであろうし、亦、父の匂いも着けられてあるのであって、それ等は全く私に何かを語り伝えようとしているようだ。

不肖の子である私に、子であるが故に今は全てを許してか、写真の「まなざし」も温かに感じ受取れる日もあり、亦、激しい怒りを示している時もある。家事万端にも不行届きの私に、教え訓しているように感ずる夕もある。

三

亡父の出生地は栃木市神明さん前の長屋の一室であったとか。亡父の母は亡父を腹に抱いて夫を失って路頭に迷っての上、遠縁に当る鹿沼の大沢楼に食寄した頃、世話する人があって、亡父を連れて大沢熊吉と再縁、その熊吉は魚屋を兼ねた旅館兼仕出屋で、その蒲焼きは天下一品の味を持っていたとか。その熊吉氏が何か鹿沼の花柳界にゴタゴタが出来た折に多数の反対党を向うに回して一談判の一幕があったのだそうで反対党の首領が「熊吉のいうように解決したら、シャモジで腹を切って見せる」と声明したが幸に事は熊吉の意の如く大団円を告げた、処で熊吉は台所から大シャモジを持出して反対党の首領の処に行って「さあ、おれのいったように事が落着したからこれで腹を切れ！」と追って大騒ぎを演じたとか。熊吉の魚は死んだ魚を活きたようにして料理したので当時人気を博したとか。その熊吉も若死にしたので亡父の母は再び独り者になったが、亡父の成長を唯一の楽しみにして主人を持たなかったのであった。

亡父は幼名を定吉と呼んで小学校を終ると鹿沼の当時土地で第一といわれた戸室や村山重吉氏の店に雇われ、肥料商のデッチとして住み込んだそうだ。母恋しく母の許に帰った時に母から強くその気ままを叱られて、以来自分からは母を訪ねたことはなかったとか。

亡父は村山氏の許で21才の徴兵検査まで奉公して独立したが、当時の退職金は一金100円也であって、それを資本に、村山氏の許で見習った、当地産の麻を売買することに志を立てたのだそうだ。

肥料の取引先のお百姓は当時何処でも麻を作っていたので、肥料代の回収に麻の現物をもって決裁するのが例になっていたので、信用貸しでお百姓から麻を買っては、それを県外の麻商人に捌いて、亡父の営業はスタートしたのであったらしい。

当時鹿沼で自転車は五指をもって数えられる程であって、その一人が亡父であり東京への往復も専ら自転車に依ったらしい。こうして亡父の営業はだんだんと軌道に乗って来、世話する人があって今市から妻を迎えた。それは岡田という教育者であって、斯くして私の誕生となった。その頃は今の天神町の唐紙の裏の家であって、私の生湯に汲んだ井戸が今の掬翠園の井戸であるとか。

亡父はますます営業の発展につれて、唐紙の裏から上横町の処に住居を転じた。私の幼少の薄れた記憶では、麻の他にまゆも併せて扱ったので、井上源八氏と共同で仲田町に製絲工場を始めたのであった。この工場には100名程の女工がガラガラガラと毎日まゆから絲を取って、それを横浜方面に出していたのであった。

井上源八氏は麻苧町に店輔を持ち、通称「油源」といって当時は立派な商人であり、その住居や店は土蔵造りの堂々たるものであった。そしてその源八氏は私の店の大番頭として活躍し、亡父は専ら外交売込みに各地を飛び回っていたので、私は亡父と共に遊山や見物に連れて行って貰った思い出は今にないのは少々淋しいが、そうした家庭的なことよりも、亡父は他所を出歩く方が忙しかったのであったろう。私もそうだから、私の弟妹達にもそうした思い出は皆無で専ら亡父の母、即ち私達の祖母が可愛がってくれたし、その郷里である栃木行きには、私は腰きんちゃくのように附いて歩いたことが走馬燈の様に思い出される。

時折亡父の出先きとの連絡に使われたのは、小学校に行くようになってからで、良く銀行への用事には喜んで自分から行った。小切手や現金を風

呂敷に包んでその腕に固く結び付けられて家を出て銀行に行ったが、其処の戸が開かないので「今日は今日は」と人を呼んでは、中から小使さんが戸を開けてくれるを待って、中に入ったので私の事を「今日はが来た」と、行員さん達は愛称していたのであった。

亡父の営業が拡く延び、東京に出店を持つようになってからは、良く現金の持運びに使われた。札を風呂敷に長く包んでそれをお腹に巻き附けて、小学生４年の頃から、現金取りに東京の出店に往復したのを思い出す。

神田三崎町の酒屋の倉庫を借りて、砲兵工廠に納める麻を沢山積み若衆が鹿沼からその倉に寝泊っていた頃、上京した折に若衆に連れられて、三崎町の東京青年会に、一夜連れて行かれた。其処で観たのが新内文弥の啄木の歌に振りがあって実に良かった。こうした因縁が今日私と新内文弥の結びつきの始めで、今に文弥さんとは交わりを持っている。

亡父の死ぬ２ヵ月程前、文弥さん一行が鹿沼に来た折は亡父は床に就いていたが、この一行を招いて、「らんちょう」の一節を聞いたのが、これが亡父として新内の聞き納めであった。

亡父は仕事の関係で相当に遊んだらしいし、女関係も人並みにあったらしく、亡母との間にも時にトラブルも発生したことを子供心に思い出せるが、これは記さぬのが良さそうだから止めとしよう。亡父の得意は常盤津であると何処かで聞いたが、それは子供の私は聞いたことがなかった。

忙しく家に帰り、忙しく飛出す亡父であったので、親子として、しんみり語り合った思い出のないことは前述したが、仕事に全身全霊を打ち込んでいたのは、自他共に認める処であろう。

四

「おれは東京製綱の山田昌邦さんには可愛がられた！」と亡父はしみじみといったことがあった。

その頃、東京製綱の本社は麻布にあったのだから、それは5、60 年前のことであろうか。

東京製綱で野州麻を使い始めた頃、どうした関係で東京製綱に売込みに行ったのか、その時分亡父は自転車で鹿沼から東京に往復し、判天着の姿

で何処にでも出掛けて、麻の売込みに努めたらしい。こうした努力を山田氏も高く買ってか、昌邦氏に可愛がられたのが切掛けとなって、全国各製綱会社に出入するようになり、陸・海軍の工廠の入札にも応じて、野州麻の相場で寝起きするようになって、亡父の黄金時代が来たらしい。

こうして東京製鋼とは深い関係が結ばれ、各製綱会社に出入した関係上、全国の主要製綱会社のいろいろな問題についても駆け走りに使われたらしい。横浜製綱を東京製綱に合併する折の黒幕の一人であったらしいし、三木竜彦氏が横浜製綱にいた折に、「今度長谷川が来たら、ワイヤーの硫酸の槽にたたき込め」と仲間に号令したとか。

東洋製綱との提携にも一役を命ぜられ、所謂業者協定の仲介の労を取らされたらしかった。

私は子供の頃で詳しいことは知らされなかったが、各製綱会社のお偉方が揃って掬翠園の客となったことを覚えている。今はそれ等の多くの人も故人となられているので、今頃は天上にあって亡父とも懐旧談に花を咲かせていることであろうし、それ等の人達の冥福を祈る心切なるものがある。

「東京製綱七十年史」中にも、亡父の片鱗は記されてあるようだから、詳しいことは七十年史に採録されている片鱗によって、亡父と東京製綱との関係を知って頂ければ幸いである。

五

戦前の亡父の商買は野州麻を主として、内地各地産の麻を取扱ったが、時には遠く朝鮮の咸鏡南道方面へまでも人を派して、同地方産の麻を買取ったこともあったようだ。

しかし時代は亡父の独専市場を許さなくなり、日を追うて売込みに苦労を増したようだ。亦買う方も亡父一手を止めて、他方面からの見積買入れもあって、次第に昔日の俤を失しつつあった。

殊に戦争ともなれば、野州麻は輸入麻が輸入困難となるので、必ず高値を呼び、相場に意外な変動を及ぼすのが過ぐる日清日露の両役から経験していた。

然し「麻も兵器」のスローガンの許に、戦争初期に野州麻は統制によっ

て、１束も商人の手に入らず、完全に農業会がお百姓から集荷し、それを軍の代行機関である「海綱会」によって検査検収され、各製綱会社の指定工場の生産能力に応じて、配分保管され、製造されて軍用に供せられた。

「海綱会」の主班には当時東京製綱の麻綱課長、今の東三麻綱の谷川社長が、海軍から佐官待遇で「海綱会」を牛耳っていた。

「海綱会」の初期に、谷川氏が鹿沼に泊り込んで或る夜、少々酔われて当家に訪ねて来て、亡父に向って「お前がオレを東京製綱に採ったので、今オレは貧乏してるのだ」等々、東京製綱へ入社当時のことを亡父に喰って掛ったことがあったが、この件も亡父が東京製綱との深い関係を物語る挿話でもあろう。その頃私の住居や店は上横町から久保町に転じていたし、上横町の住いは一部を千葉九十九里浜に移設して、次男善次郎の管理する松濤園の一部となった。

商買を失った亡父は店を町の警防団の事務所に提供して、自分達は裏の掬翠園の一室に引込んだが、そのころの亡父は 70 才を過ぎていたので、自分の身体のお守りに終始し、初めて、上山田温泉の湯が性に合うからといっては、もんぺ姿で上山田で暮らす日が多くなった。

戦時中空襲が激しくなって来て、往復にもいろいろの困難がともなう頃となっても、上山田行きは止めなかった。如何に説得しようとしても云い出したら人の進言なぞ聞き入れぬ亡父でもあった。

「商買をすれば無理になるし、それに闇はいやだ。この年になって、ブタ箱入りはご免だ」といって、無理をしなかった。しかし亡母はタンスの品を出しては、食料品の入手に懸命の努力を払っていたが、こうした、戦中戦後のいろいろな社会的家庭的激変に耐え兼ねてか、母も病を得て遂に戦時中に他界したのであった。

千葉の九十九里浜の次男善次郎は軍需工場勤めからの無理が重なって戦時中に死去し、私の妻も戦争中に死んだので、３つの葬式を出した亡父は、ますます人生の悲哀を味ったのか、日増しに身体的な衰えを示して、昼も床に目を閉じていたのであった。昔に帰って俳句を書いてはと手帖と鉛筆を枕許に置いたが、それを取ろうともしなくなって了って、七十七の祝い

の折の句が絶句となった次第である。

六

序文を頂いた天香さんと亡父とのことについて報告することも因縁であろう。勿論亡父と天香さんの関係は、私が一燈園に行ってからのこと。その当時亡父は宇都宮市にあった下野中央銀行の重役をしていたが、同じ重役仲間に烏山の大橋氏がいた。その大橋氏の令息も一燈園に行かれたので、親同志お互いに一燈園に息子が行かれたので親としての淋しさもあってのことだろうか、「他所の便所掃除をするのに、学校へやった訳ではなかった」と語り合ったと。

初めて天香さんがわが家の客となった時の住居は上横町であった。当時は亡父の盛んであった頃なので、住居も店も倉庫も１カ所にゴテゴテとしてあった。住居の居間には仏壇があって、その下に大黒天がお祭りしてあった。

その大黒天は東京駒込からお迎えしたのが本尊となっている。亡父の若い頃に月島の東京製綱の工場に行った折、渡船湯で舟を待っている間に、見知らぬ人から「福分ち」と称して駒込の大黒さんの写し絵を貰ってから、それを信仰するようになったのだそうだ。一升桝の中に、年々駒込の大黒天神社から、お姿を迎えて来てはそれを家の大黒天の本尊として祭り、去年の初子の日に祭ってあったお姿は、掬翠園入口の大黒天神社と称する処に納めて隠居して貰う家風になった。

この掬翠園の大黒天神社の建物は掬翠園造園の折に茂呂山頂にあったものを入手して移設したのであるが、その彫物の上り竜と下り竜は実に美事に出来ていて来園の客を驚かしていた。茂呂山頂にあった折には、所謂サヤがカバーしてあったので、雨風から保護されていた故でか、破損を被っていない建物である。この大黒天神社の入口、石鳥居正面の石の額に彫られてある大黒天神社の筆は、東京製綱株式会社の社長であった山田昌邦翁によって書かれたのであって、亡父と東京製鋼との関係については、前述した如くである。

「年に一度は屋敷内に他人様を入れるものだ」と亡母はいって参詣の人

達に小槌の形のセンベイを笹に附けて差上げたこと等々を、子供の頃に手伝った思い出が湧いて来たが、園内のお堂では、旧４月８日に花お堂を飾って、花祭りの可愛い竹の手桶に甘茶を入れたのを、紙の傘を竹の先に突差して、それを赤い木綿糸で吊して配ったものだ。

話が混線したが、この大黒天の前に初めて天香さんが亡父に案内されて座り、前述の来歴をきいていられたが、天香さんの下座の生活と、頭を低く垂れて大黒さんを拝む亡父の心とは、一脈相通じたのか意外の共感を得たらしかった。

それに亡父と天香さんとは一つ違いの年輩であったので、同年の親しみもあってか、亡父も天香さんの来られるのを楽しみに待つようになった。亡父は造園の苦心やら自分の人生行路を細かに天香さんに語ったらしく、私達子供の知らないことなども語ったらしく、後日天香さんから、亡父についてのことを聞かされた次第であった。

亡父も、天香さんもおそばが好きであったので天香さんが見えると必ず亡父がお相手をしておそばを供し、亡父は鹿沼の名物でお美味しいことと誇らしく説明していた姿が頭に浮んで来る。

前述のお堂は天香さんのお気に召したらしく、初めて来られた折であったと記憶してるが、揮毫を求めた折に「第一義峰」と書かれた。この天香さんの額は今もお堂に掲げてある。

この天香さんの筆は実に美事な出来栄えであって、私も天香さんのお供をして、伊勢路、中国路を行脚して、種々と多くの天香さんの筆蹟に接してはいるが、この「第一義峰」は天香さんとしても、逸品であろうと思っている次第である。

蛇足とは思うが天香さんについて、亡父と共感を得たらしい点を思い出すと天香さんは青年時代に、近江で呉服のセールスマンをしていて、琵琶湖の増水に郷里長浜の田畑が流失し、地獄と化した土地の農民と共に、北海道に移民したのが明治 20 年頃、開拓事業も意の如く進まず、日清・日露の役と過ぎて平和であるべき世界に、戦争の過根を絶つ生活をと発心したのが、一燈園生活のスタートときかされているが、所謂商人としての若

き日の苦労が、亡父の過去の若き日と共感を得たのであったのであろうか。

足らぬだけ　仏に佗びて　年暮るる

２回か３回目の天香さんの来られた折に、掬翠園の芳名帖に記された句であるが、亡父も俳句に親しんだので、この点でも共感の場があったようだった。

今は亡き妹とみ子も、天香さんの燈影精舎の初代の一員として、当時京の下総町で天香さんの亡妻である「勝淳さん」や、天香さんの亡長男のお嫁さん「漣月さん」達の御指導を頂くようになった頃から、亡父と天香さんとの交りもいよいよ濃くなり一時は掬翠園の全ての建物に、一燈園関係者が泊り込んで「下野一燈園」の観を呈して、その行事もすべて京鹿ヶ谷の道場通り、万事を整えて厳粛に行ぜられたのであった。

当時お店には数人の店員がいたが、朝なぞは競争のように掬翠園の起床合図の木の音に、先を争って店員達が起きて道路の清掃をしたので、翌朝は掬翠園の一燈園同人達が先に起きて、道路の清掃をするような微笑ましい風景もあったのである。店員達もこれ等のことから天香さんに接したり、一燈園の空気にも若干は触れていたので、退店後の今日の旧店員達には、その当時の微笑ましい思い出話を聞かせてくれたことも亡父の法事の折であった。

亡父が天香さんを迎えて、最後に会われた折には亡父も身体の弱った頃であったので、２人して、お互いに、いたわり合い、励まし合っていたのであったが、その父は今に亡くして３周忌を迎えようとしている。

天香さんはお元気で来る５月５日には、京の山科にある光泉林で米寿祝いを全国の光友等の会によって営まれるので、私もその祝いには久々で馳せ参りたい予定でおり、傍々亡父の遺歯を持って善光寺にも納めたい予定を持っている。

父が死んだ後に天香さんが来られて、話し相手のないお堂に座した折に、一筆を乞うたら早速次の歌を書いて下さったが、巻頭の序文にあるように、天香さんも亡父の冥福を念じていて下さると信じ、天香さんのますます長寿を全うされんことを念じてこの項を終ることにしよう。

この冊子を御覧頂く皆様には、定めし父とのいろいろな面での御交誼のあった方々故、父について子である私達の知っていない数多くの事柄を思い出され、感じられることであろうと考えられますので、何卒お忙しくもそれ等のことについて、御教導を頂けるならばそれが即ち亡父への良き手向けであり、供養であると信じますので、皆様からの読後感とでも申しましょうか、何んなりお便りを頂けることを心に願っている次第です。

お忙しい時間をお割き頂きまして、本書を御覧頂いた御友情、御芳志をうれしく感謝合掌いたし、貴家の御健康と御繁栄を心から祈らせて頂きます。合掌

長谷川唯一郎年譜

明治 6 年　3 月 28 日	栃木市神明さん前で生まる。
同　12 年　4 月 1 日	鹿沼市村山重吉商店へ店員として入る。
同　18 年 12 月 28 日	鹿沼市大沢熊吉の長男養子となる。熊吉死去により後日さらに長谷川家の養子となる。
同　27 年　1 月 10 日	村山商店を退店して独立。（天神町唐紙裏）
同　32 年　1 月 26 日	今市福田庄三郎長女カネを嫁に取る。
同　33 年　1 月 26 日	長男栄一郎出生。（現在掬翠園慶雲居に住む。日東麻綱株式会社取締役、日光線通運株式会社、中央商事株式会社、不動産株式会社の各監査役）
同　35 年　7 月 1 日	上横町に店舗住居を移設。
同　36 年　9 月 19 日	次男善次郎出生。
同　37 年　6 月 3 日	東京神田三崎町に東京出張所を新設。
同　39 年　3 月 15 日	長女とみ子出生。
同　40 年　9 月 10 日	神田本銀町（鎌倉河岸）に東京支店を設ける。
同　41 年　7 月 11 日	鹿沼に電話開通。当時 36 才なりしをもって電話番号 36 番を選び、現在に至る。
同　42 年　7 月 1 日	二女ふみ子生まる。（現在掬翠園観濤居に住む。茶道師匠）

同　45 年　2 月 9 日		三男勝三郎出生。(現在毎日新聞大阪本社工務局長、西宮市に住み家族は成城に住居)
同　44 年　3 月 13 日		三女大野勝子生まる。(現在向島弘福寺地区に住む。お茶の師匠)
大正 2 年　8 月 1 日		神田大伝馬塩町に東京支店移設。
同　3 年　4 月 3 日		壬生町に支店設。(次男善次郎経営)
同　6 年　7 月 11 日		亡父の母カネ死去。(73 才)
同　7 年 10 月 30 日		壬生町支店閉鎖。
同　9 年　7 月 1 日		千葉九十九里浜に別荘を設ける。
同　9 年　1 月 7 日		長男栄一郎神戸東京製綱兵庫工場に勤務。
同　9 年　8 月 10 日		鹿沼運輸株式会社設立社長就任。
同　12 年　9 月 1 日		関東震災大伝馬塩町東京本店焼失。
同　13 年　7 月 5 日		神田美土代町に東京支店を設ける。
同　13 年　1 月 10 日		東京製綱と鹿沼麻糸工場組織。
同　同　20 日		長男栄一郎神戸東京製綱兵庫工場退社、鹿沼麻糸工場事務取扱。
昭和 4 年 3 月 15 日		新鹿沼合同運送株式会社取締役就任。
同　6 年 11 月 29 日		合資会社長谷川商店組織。
同　8 年 6 月 17 日		長男栄一郎に、佐野市荒井ミツ子を嫁に取る。
同　9 年 1 月 10 日		孫澄子出生。
同　9 年 2 月 28 日		合資会社長谷川商店解散。
同　10 年 5 月 38 日		孫イソ子出産（現在濠州に在り）
同　11 年 6 月 22 日		孫一郎出産（現在、千葉工大機械科在学中）
同　12 年 12 月 20 日		孫澄子死去。（４才）
同　13 年 4 月 10 日		長女トミ子死去、(浦和、天羽生に嫁して 33 才)
同　13 年 4 月 28 日		孫マス子出産（現在、自由学園学部卒業して江上料理へ通学中）
同　17 年 1 月 10 日		鹿沼麻糸工場解散、日東麻綱鹿沼工場へ改組。
同　18 年 3 月 20 日		鹿沼運輸株式会社改組、日光線通運株式会社々

長就任。

同　18 年 10 月 1 日　　久保町店舗を鹿沼警防団に使用提供。

同　18 年 11 月 4 日　　孫キミ子出生。

同　20 年 7 月 27 日　　長男栄一郎妻ミツ子死去。(39 才)

同　21 年 2 月 25 日　　長男栄一郎に宇都宮市阿部喜美子を嫁に迎える。

同　21 年 7 月 7 日　　次男善次郎死去。(44 才)

同　22 年 2 月 13 日　　久保町店舗を鹿沼商工会議所に売却して隠居。

掬翠園慶雲興に住む。

同　32 年 5 月 11 日　　唯一郎死去。(85 才)

当時は日光線通運株式会社監査役

下野中央商事　〃　取締役

不動産　　〃　　〃

② 長谷川唯一郎ゆかりの掬翠園

柳田芳男『かぬま郷土史散歩』
（平成３年４月 28 日・晃南印刷）

２、長谷川唯一郎と掬翠園

長谷川掬翠園は、旧警察署の前、旧商工会議所（現　宇都宮証券鹿沼支店）の裏にあたる。その造園主長谷川唯一郎は、明治６年に栃木町で生れ、同 12 年から鹿沼町吾妻町（現銀座一丁目）の村山商店（後に晃南荘を造る）で丁稚奉公、21 歳で独立し、麻の売買を始めた。住居・店舗を天神町から上横町、久保町と移すにつれ、鹿沼屈指の麻商となっていった。全国的な取引から、東京製綱との関係が出来、同社をバックに、大正 13 年、上田町に鹿沼麻糸工場を設立した。現在の八百半北部店付近で、約 100 名の女子従業員を使っていた。同社は、昭和 14 年に日東麻綱に改組、同 17 年に東京製綱と合併し、同 19 年に仁神堂に移転している。

唯一郎は、また、大正８年に鹿沼運送会社を創立、さらに昭和２年には運送店３社を合併して鹿沼合同運送会社を設立し、初代社長に就任、同 18

年には国鉄日光線各駅の業者を糾合して日光線通運会社を設立し、社長に就任している。その間、銀行の重役や町会議員などの要職に選任されている。

氏は、掬翠園に、明治 45 年から５年間の歳月をかけている。３名園のなかでは、最も町なかに位置しているので、そこに深山幽谷の趣を出すのに苦労している。その構想とプランは氏の創作で、樹木や碑塔類は、氏が各地を歩いて選定したものである。園内２棟の小社寺も他所から移築したもので、そのうち、向拝付方形造の瑠璃殿は、山久保（日光市）にあって、日光修験の峰修行の休息所としてのお堂であったもの。もとは薬師堂として、明和３年（1766）の建立である。現在の本尊は銅造阿弥陀如来坐像である。園の入口は西側であるが、門を入ると北側に大黒天神社がある。これも茂呂山頂にあった小祠を移築したもので、流れ造、竜の彫刻が精巧に出来ている。祠前の一対の石灯篭は、享保 20 年（1735）の作である。

曲がりくねった泉池、とりまく奇岩、一枚石の橋、４メートル近い石灯篭が４つ５つ、その間に碑塔類が点在している。昨年、氏の嫁喜美さんが唯一郎を偲び、氏の句碑を建てた。

落つるまを　風の抱える　一葉かな　　唯一

戦時中、長谷川商店は、店を警防団の事務所に提供し、戦後、昭和２２年に、その事務所は鹿沼商工会議所の手に渡っている。

唯一郎の長男が黙念栄一郎である。若くして一灯園に入った。一灯園は、明治 38 年に西田天香の創立した修養団体であり、またその道場名でもあった。京都市山科にあり、托鉢奉仕を行とし、光明祈願を主旨としていた。はじめ、「よその便所掃除をするために伜を学校へやったわけではない。」と反対し、黙念が伊勢路へ托鉢中、「伜を返せ」と天香師に強談した父唯一郎も、すぐに師に私淑するようになり、一時、掬翠園に一灯園関係者の往来がしげく、「下野一灯園」の観があった。

黙念は、戦前から少年団運動に打ち込み、また、園内の瑠璃殿を道場とし、素人の仏典研究会である「お経を味う会」を主宰していた。氏の特筆すべき点として、栃窪薬師堂の木喰仏の保護に力を尽してきたことをあげ

ることができる。「木喰上人長崎歌集」や「大麻の研究」などの著がある。

氏の妹が、茶道では県下随一と定評のある長谷川宗召（ふみ子）である。掬翠園内の観涛居を居とし、宗偏流最高位の正教授会の正会員で、お弟子さんが多かった。御兄妹とも今は亡い。

③　鹿沼の麻商の仕事

栃木県立博物館調査研究報告書「野州麻づくりの民俗」より
（栃木県立博物館・平成 13 年３月）

問屋

鹿沼の問屋　カミグチ（上口）の佐渡屋、ニシグチ（西口）の岡本をはじめ、小西麻店、長谷川商店など多数の麻問屋が存在した。このうち佐渡屋は、麻問屋と仲買の組合である「鹿沼大麻芯縄協同組合」」を設立するなど、昭和 48 年に廃業するまで、鹿沼市において中心的な役割を果たした麻問屋である。出入りの仲買の数は昭和 30 年頃でおよそ 70 から 80 人おり、鹿沼町内、板荷、東大芦、小来川、文挟、落合周辺の人と取引していた。買い付けた麻は常時 3000 から 5000 把の在庫があった。仲買から買い付けた麻は屋敷内の石倉に保管していた。石倉は８棟あり、これらは麻の他に肥料も保管していた。茨城や千葉の網元や大阪の問屋などには相場をみて売った。

佐渡屋をはじめ、鹿沼の麻問屋は肥料商を兼業したところが多い。このような問屋では、農家に干鰯など肥料を販売し、代金の代わりに精麻を買い受ける方法をとっていた。買い受けた精麻は茨城や千葉の網元に販売し、そこで肥料（干鰯）を仕入れた。鹿沼に集められた野州麻の多くが、魚網加工用として茨城や千葉など太平洋沿岸の地域に出荷されたのは、こうした背景も関係している。この関係は、漁網用として野州麻が利用された昭和 30 年代まで続く。

栃木の問屋　栃木は巴波川の水運により発展した町である。ここに集められた物資は、船で江戸に運ばれた。栃木周辺で生産された野州麻も、ここ

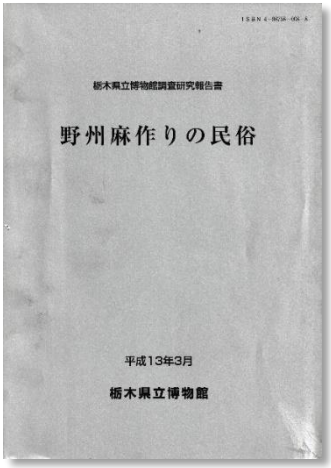
から江戸へ運ばれた。多くは下駄の芯縄用であった。これは、少なくとも江戸時代よりみられた。栃木に集められた精麻は、栃木、都賀、西方、粟野、葛生で生産されたものである。特に粟野や葛生で生産された麻は、高い品質のものだった。

栃木の問屋の多くは巴波川沿いにみられた。栃木市史によれば、「泉町の佐柄麻苧店、万町の黒川、中田、万三麻苧店」の名があり、現在も数軒の麻問屋が営業を続けている。栃木の麻問屋の多くは、鹿沼の麻問屋のような肥料商を兼ねたものはなく、多くの場合は専業、あるいは芯縄加工業と結びついたものだった。出荷先も鹿沼とは異なり、大部分は東京や大阪などで、用途のほとんどが芯縄用である。

麻市

鹿沼　毎月４と９のつく日、すなわち４、９、14、19、24、29 日が市日だった。戦前までは佐渡屋と岡本が元締めとなり、市を開いていた。場所は各問屋の倉庫が使われた。

戦後は特定の場所での市の開催はなく、以前の市日に仲買人の自宅に問屋の主人が出向いて麻を買っていくようになった。そのためこの日の仲買は休みとなり、仲買人は自宅で待機するようになった。主に栃木の問屋が買いにきた。取引に用いる符牒は荒物屋などが用いるものである。代金の支払いは来市（次の市日）のときに行われた。ある仲買人はシキリと呼ぶ書き付けに等級と数量、単価、合計金額を書いておき、支払いのときに確認した。等級はシルシといい、一番よい麻はイ印、二番はロ印、三番はハ印とあらわした。原則としてお互いにメモをつけているので、契約書などはとくに取り交わさず全て信用取引で行われた。商品の運搬は鹿沼の丸通を利用したり、問屋が自家用車で運んだりした。



初市は１月９日である。売主は買人に酒と肴を出して振舞った。また、お年始として手拭を

配った。この日はご祝儀相場で、売買価格は少し高めであった。

楡木　昭和 25 年から昭和 55 年頃まで行われた。２と７のつく日が市日だった。楡木駅付近の金子氏と小松氏の家が取引の場となり、前者は金子市場、後者は小松市場と呼ばれた。金子市場には主に北犬飼・上石川・茂呂（鹿沼市）など黒川より東で栽培された麻が集まり、小松市場には小倉橋周辺の楡木や藤江（鹿沼市）で栽培された麻が集まった。

野州麻の流通と利用

野州麻は鹿沼や栃木の問屋を経由して全国各地に出荷された。このうち精麻は麻問屋から東京、大阪、愛知など東日本一帯に、皮麻や麻幹は荒物商から、前者は主に広島や岡山へ、後者は東京を中心として全国各地に出荷された。

麻は強靭、かつ良質な繊維がとれることから、古くから織物や綱などに利用された。精麻をめぐる環境は時代によって大きく異なり、利用される形態も変化している。江戸時代から昭和中期、いわゆる野州麻の全盛期においては、下駄の鼻緒の芯縄、綱・ロープ、漁網を中心に、蚊帳、衣類など織物の世界でも野州麻が利用された。また、日清・日露戦争、第２次世界大戦前後には艦船の綱、大砲の綱など軍関係の製品に多くの麻が使用された。

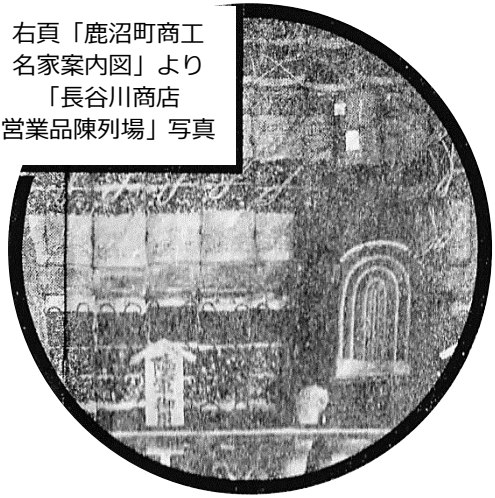
（中略）

野州麻は信州麻（長野県産の麻）、芸州麻（広島県産の麻）といった国内の麻に対しては優位を保ったが、明治時代中期より中国産の麻（南京麻・満州麻）に価格面で脅かされ、大正時代になるとマニラ麻によって大きな打撃を受ける。さらに第２次世界大戦後は化学繊維の出現により決定的な打撃を受ける。これより、綱やロープ、漁網、織物に関する野州麻の需要はほとんどなくなる。

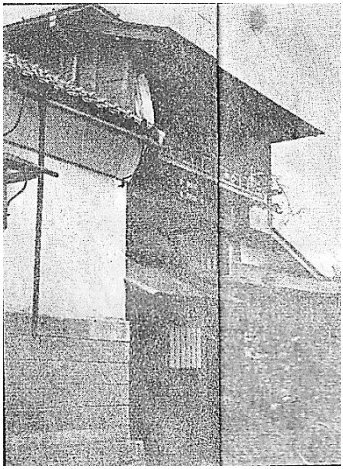
生麻まるき
（刈り取った麻を揃えて束ねる作業）

近年は、麻の持つ呪術性から縁起物、神具への利用が最も大きな部分を占める。また、下駄の鼻緒の芯縄への利用も残っている。古典芸能や民俗芸能など古いしきたりを重んずる世界からの需要も根強く、大相撲の横綱、弓弦、古典楽器の紐、凧糸などにも利用されている。

地図・絵葉書・写真帖に見る郷土の風景



右頁「鹿沼町商工名家案内図」より「長谷川商店営業品陳列場」写真

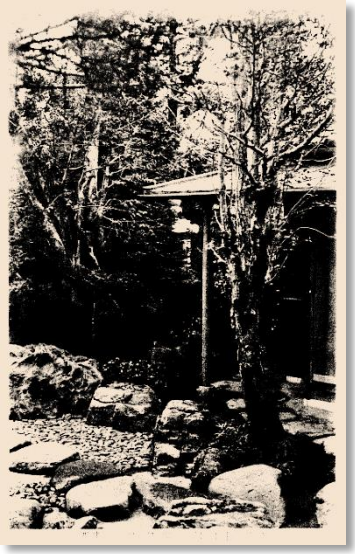


同「麻苧問屋長谷川商店」

当時の鹿沼市役所外観
（「鹿沼市勢要覧」昭和 24 年版より）
右ページの大正年間の地図に「町役場」とあるのもこの建物

「鹿沼町商工名家案内図」（大正２年 11 月９日発行）より部分拡大図

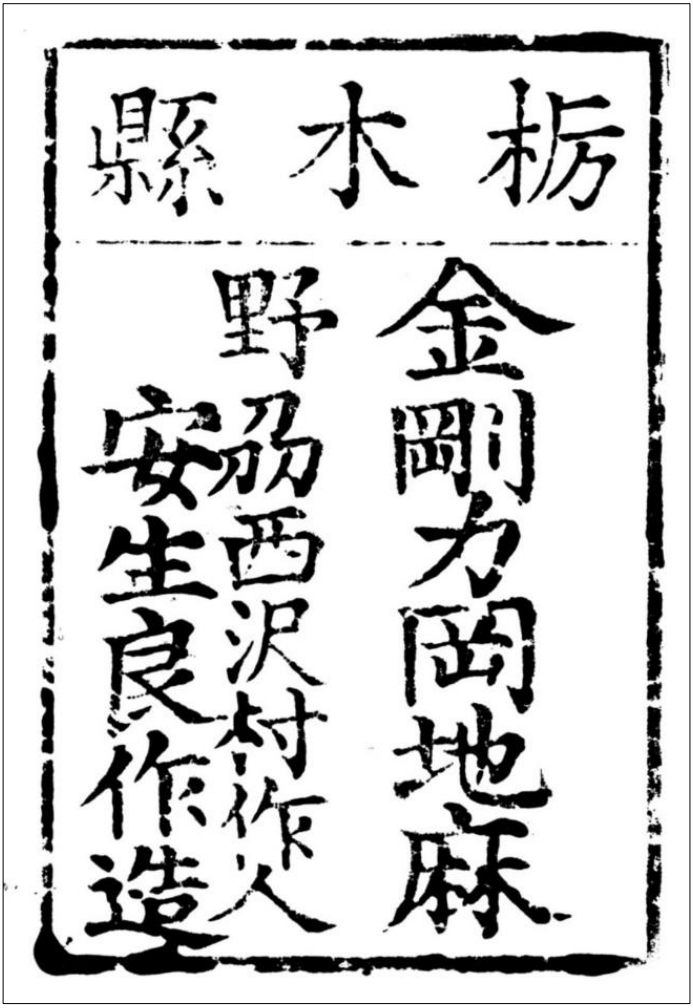
絵葉書「下野国鹿沼町掬翠園」（全６葉）



家族の風景

長谷川栄一郎（中）
唯一郎（右）の父子
掬翠園の一角にて
（左は長谷川家番頭の大谷さん）
写真提供:新川キミ子さん
（唯一郎の孫）

写真を提供してくださった
新川キミ子さん中３時（1959 年）
の家族写真（本人は後列中央）
前列、長谷川栄一郎・喜美子夫妻



出荷される麻束に付されたと思われる紙札。（木版）

「金剛力」は強さを強調するブランド名か。

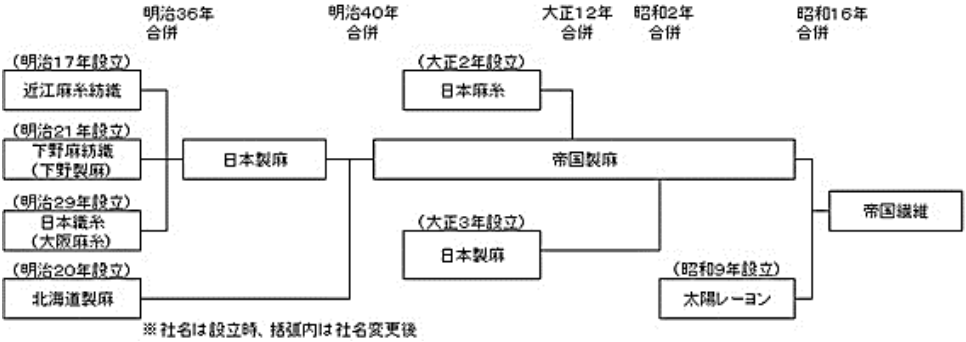
「岡地」は西沢を含む南摩の他、粟野、清洲地域で生産された精麻に付けられた銘柄。銀白色で細微、強靭さはやや劣る、といった特徴を持つ。麻は水に濡れるほどに強靭さを増す繊維で、この地のものは釣糸が主な用途。

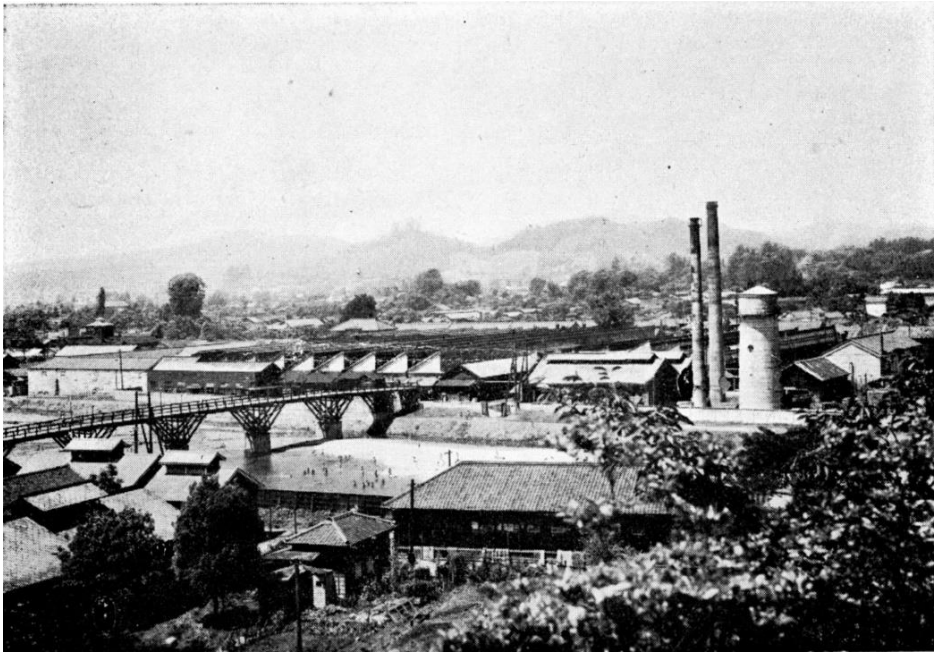
「野州西沢村作人　安生良作」により栽培・収穫・精製されたことが示されている。と思われる。

《ちょっと余談》麻と鹿沼とテイセンのはなし

▷鹿沼で麻というと「野州麻」、古くから栽培され、文化活動交流館では伝統的な麻生産の道具の展示を見ることができる。
▷「麻」と言っても実は全く種類の異なる、有用な繊維が採れる植物の総称で、20種類ほどもあるという。「野州麻」はその中のクワ科の「大麻」（ヘンプ）で、原産地はヒマラヤ方面と見られ、日本には中国から最も古い時代に渡来した帰化植物とのこと、縄文前期の遺跡からも出土している（土器を飾る縄目模様も麻縄でつけられたのかも？）。同じく古い帰化植物でイラクサ科の「苧麻」（ラミー）は「からむし」「まお」等と呼ばれ、共に「麻」として日本人の歴史と共に歩んできた。
▷「大麻」はその幻覚成分（日本で栽培されているのはほとんど含まれない品種というが）のために戦後 GHQ の規制を受け、その後「大麻取締法」の施行（1948年）、さらに化学繊維の台頭もあって生産者数・生産量とも激減の途を辿った。栃木県は日本国内でも残り少ない「麻」の生産地として、伝統的な神事に不可欠な素材の供給源にもなっている。
▷ところで黒川河畔に展開する「帝国繊維」は、明治 21 年に「下野麻紡織」として、地元で生産が盛んだった麻を原料とする繊維産業として、地元民間人と安田善次郎（安田財閥の祖）・渋沢栄一・大倉喜八郎らの出資により設立された企業である。これは、殖産振興の国策の下、多くの官製企業が興される中では異例のことという。また、動力として地元の水力による発電を利用するというのも先駆的であった。日清、日露と戦争のたびに軍用品生産で繁忙を極め、終戦後の不振を繰り返すなどのうちに同業他社との合併吸収を重ね、その過程で、繊維の性質上機械紡績に不向きな「大麻」から、輸入などによる苧麻の専門工場に転換、明治末年には地元原料との関係は消滅したという。大麻を扱う工場は鹿沼にその後何社か設立されたが、第２次世界大戦前から戦中にかけて、「帝国繊維」に吸収され、麻紡織部門の一大国策企業となり、戦後、「過度経済力集中排除法」（いわゆる財閥解体）により分割された。その後同社はこの別の「麻」から作られる消防ホース（明治 36 年に大阪で国産化に成功）から発展して、消防などの防災車両や各種防災機器を主要分野とする企業に変貌している。鹿沼工場での麻部門は 1971 年に生産を終了したという。（会社としてはリネン生産分野も残し、ショッピングセンターなど不動産業にも展開中）

戦前の製麻会社合併の歴史　（帝國製麻株式会社五十年史より）





帝国繊維鹿沼工場概観（昭和 24 年頃）
東岸側から見た様子
中央左に黒川を渡る「睦橋」が見える（数年前の洪水で流されて今はない）

本編に関連する図書　　（鹿沼市立図書館蔵書は○）

長谷川栄一郎著『父を語る』（1959）　○
『木喰上人長崎歌集』（新里宝三共著）（1968）　○
『大麻の研究』（1937）　○（禁帯出）
柳田芳男著　『かぬま郷土史散歩』　○
栃木県立博物館調査研究報告書『野州麻づくりの民俗』（2001）　○
『東京製綱七十年史』（1957）　○（禁帯出）
『帝国製麻株式会社三十年史』（1937）　○（禁帯出）
『帝国製麻株式会社五十年史』（1959）　○
石田典行「栃木県における麻工業地域の構造」
（東京学芸大学地理学会「学芸地理」30、1976.3.31）

あとがき

川上澄生美術館の元名誉館長、故長谷川勝三郎の著書には豆本『澄生さんと私』がある他、名誉館長時代に美術館発行の図録に度々寄稿されている。また、主に趣味・コレクション関係の雑誌にも数多く寄稿されているようである。それで、いつか勝三郎を本誌で取り上げようと思って、資料蒐集に励んだ。「日本の古本屋」サイトで、ふと勝三郎の父、長谷川唯一郎を検索してみると、長谷川栄一郎著『父を語る』が出てきた。さっそく取り寄せて読んでみると、冒頭、亡くなる唯一郎を看取る家族の中に「キミ子」の名前が見られる。それで、新川キミ子さんに尋ねてみると、『父を語る』は、祖父・唯一郎の葬儀に参列された方に、一周忌のおり差し上げたものだ、とのことであった。黙念・長谷川栄一郎は、唯一郎の長男で、新川キミ子氏の父上である。勝三郎は唯一郎の次男で、キミ子氏の叔父にあたる。

当初は勝三郎と唯一郎をまとめて取り上げようと考えたが、唯一郎は鹿沼屈指の麻商であり、鹿沼の歴史上重要な人物といえるので、唯一郎を独立して特集することにした。勝三郎が関わった図録、寄稿した雑誌等もずいぶん蒐集できたので、いずれ「コレクター長谷川勝三郎」として特集できると思う。

長谷川唯一郎について語ろうとすると、麻について触れないわけにはいかない。それで、「日本の古本屋」で「野州麻」を検索してみた。『野州麻の生産用具』という本が各古書店から10冊ほど出品されている。その中に、栃木県立博物館の編集・発行になる『野州麻作りの民俗』という本が、こちらは1冊だけ出品されている。出品しているのは郷土誌の収集に力を入れている水戸の「とらや書店」。少なくとも現在「日本中で一冊しか出品されてない本」を見つけると、とりあえず確保しておきたくなる。注文して頁をめくってみると、明治・大正期における鹿沼での麻取引について詳しく書かれている。佐渡屋や長谷川商店の鹿沼の経済・文化史上における位置を窺い知ることのできる一冊である。

小誌の編集にあたっては、貴重な写真を提供してくださった新川キミ子さんに、改めて感謝申し上げますと共に、末長きご健康と益々のご活躍をご祈念申し上げます。

（阿部良司）

本号の内容

長谷川栄一郎『父を語る』より「父の思い出」「長谷川唯一郎年譜」・・・・　２
柳田芳男『かぬま郷土史散歩』より「長谷川唯一郎と掬翠園」・・・・・・１５
栃木県立博物館「野州麻作りの民俗」より・・・・・・・・・・・・・・・・１７
地図・絵葉書・写真帖に見る郷土の風景　・・・・・・・・・・・・・・・・２０
あとがき　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７

鹿沼に生きた人、生きている本・第4号

2021年2月発行

小さな旅クラブ　鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人　阿部　良司

携帯　090－1884－3774

FAX　0289－62－3774

携帯✉shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail　abe@abe-clean.jp